

日付:2014年11月2日／聖書:イザヤ書40:1～11

主題:「傷ついた葦を折ることなく」

来年は、戦後 70 年を迎えるが、ただ沖縄の置かれた状況を見ると、沖縄は未だ「戦後」が来ていないと言われる。あの戦さから 70 年が経とうとするこの時も、沖縄には戦争を忘れさせてくれない、米国占領軍が今なお居座り続け、戦争の音、戦争の臭いをまき散らしている。辺野古のおじい、おばあちが、大浦湾に浮かぶ自衛隊の戦艦を見て、「戦さうみんじやすんや～(戦争を思い出すね)」と言う。

沖縄戦の終結の頃に作られた沖縄民謡で「屋嘉節」がある。金武町屋嘉に捕虜収容所があったその収容所の中で作られ、歌われてきた。

なちかしや沖縄 戦場になやい／世間御万人ぬ袖ゆ濡らち
(訳) 悲しい沖縄 戦場になり 世間御万人の袖を(涙で)濡らし

涙飲でい我んや恩納山登てい／御万人とう共に戦凌じ
(訳) 涙(を)飲んで 私は恩納山(に)登り 多くの人と共に戦(を)凌ぎ

心勇みゆる四本入り煙草／さみしさや月に流ちいちゆさ
(訳) 心励ますことができるのは四本入り煙草 淋しさは月に流していくよ

この他にも戦争の悲しみ、辛さを歌った民謡は、いくつもあるが、沖縄の人々は、そのようにして自らの涙をぬぐい立ち上がろうとしたのかと思う。

イザヤ書 42 章は、「僕の歌」と称される箇所である。ユダ国が戦さで敗れ、多くの民が強制連行されて異国の地、バビロンにおいて差別的な、抑圧的な生活を余儀なくされていた。もうすでに 50 年が経過し故郷に帰りたいという思い、希望は消えかかり、心は折れそうな、そういう状況がそこにはあった。この主の言葉は、今にも心折れそうな、希望の光が消えそうな、そんな人の側に“主は我らと共にいます”ということを書き記すのである。

主は、「傷ついた葦を折ることなく／暗くなってゆく灯心を消すことなく／…捕らわれ人をその枷から／闇に住む人をその牢獄から救い出す…」とおっしゃっている。この主の言葉を、涙をぬぐい立ち上がらせてくれる希望の言葉として受け取っていきたい。(神谷)